

「混沌」たるフィールドから

藤本 武

文化人類学の調査でエチオピアを訪れてからあつというまに8ヶ月たった。

現在私が調査しているのは、エチオピア西南部に暮らすオモ系農耕民の一つマロ (Malo) という人々である。北から南へ流れるオモ川が一時西流する際の南側の地域に彼らは住んでいるのだが、そのあたりは山また山の険しい地形で (標高600-3,400m)、その中の1,000mから3,000mほどの傾斜地に点々と散村的に暮らしている。私の滞在する一行政村 (人口約1,000人) でも標高差が1,000m近くあり、谷筋をはざんだ隣村の様子をはっきり見渡すことができる。

ウシ、ヒツシ、ヤギ、ニワトリ、ウマ、ラバ、ロバと家畜飼育も盛んであるが、彼らは主に農耕で生計を成り立たせている。栽培作物は穀物とイモ類に限ってみても、コムギ (エンマーコムギを含む)、オオムギ (二条、六条とも)、エンバク、テフ、モロコシ、トウモロコシ、エンセーテ、タロイモ、ヤムイモ、ジャガイモ (*Solanum tuberosum* ではない模様)、サツマイモと多種多様である。

さて私にとっては今回が初めてのフィールドワークなのである。それにのぞむにあたってどんな問題意識をもっていかを記しておきたい。

私は、人と植物世界とのかかわりを、利用法などを中心に具体的かつ詳細にわたって調べ、またその植物を彼らがどのように分類・認識しているかあきらかにしていく、民族植物学((エス)ポタニー)という分野に関心を寄せている。しかし、私の限られた知識のなかでも、今までの学問的成果をふりかえてみると、いくつかの不満に思うことがある。

ひとつは利用法にせよ、分類法にせよ、固定的・静態的なものとして描く傾向があったことである。文化人類学的な調査は、しよせん共時的なものであるのかもしれないが、通時的な関心をもって調べていくことにやや不十分であったように思われる。また社会内での差異を不問にし、斉一的なものとして提示する傾向があったように思うのである。そしてそれに関連するが、調査者はどのような人からどういった状況で個々の事例を調べていったのか、必ずしも明示されていないように思う。おそらくは、一人もしくは数人の特定の (植物に詳しいと思われる) 人物からの聞き取りにもとづいているのだろう。しかし、それをある社会の植物利用あるいは植物認識と一般化してしまうのは、ある意味で飛躍といえないのだろうか。また複数人から聞き取った際には不一致がみられることは容易に予想されるが、それらをどう扱っているのか、よくみえてこないうらみがあった。

そこで私はとりあえず状況 (いつ/どこで/誰と/何を/どうした等) の記載を徹底しようと考えた。そうすることで、今あげたいいくつかの問題に対してなんらかの対処が可能になる、あるいはより深い理解が得られるかもしれないと考えたのである。

しかし調査を開始した現在、この手法がうまく機能しているようには思えない。あまりにも無味乾燥なのだ。自分用の記録以上のものに、どうすればいかしていけるのだろうか、と、やや途方に暮れているのが現状である。

そして、肝心の聞き取りの内容については、これが思った以上に混沌としている。私は特定の通

訳はつけず、できるだけ彼らの言葉で、やや込み入った話はアムハラ語で調査を行っている。聞き取った人によって食い違いや矛盾が出ることは予想していたものの、それだけでなく同じ人から聞いた場合でも、時により言うことが異なったりするのである。これこそ状況の問題というところなのだろうが、以下で述べるように、私はそれで解決できる問題ではないと思っている。また私の聞き取った20人あまりの中では、ある人物がすべての植物について知っているということはなく、かといって知っている植物については一通り把握しているのかというところでもなく、ひどく断片的なことが多い。考えてみれば、これはあたりまえのことかもしれない。ある人物は同定はできるがそれ以上は知らず、逆にある人は名前とその利用法のみを知っており、別の人は名前とその分布地をよく知っていたり、といった具合である。

この混沌たる事態を、どうとらえていけばいいのだろうか。聞き取った際の状況と結びつけることで整理していけばいいのかもしれないが、そうきれいにいってくれるだろうか。ただ、思い当たることがないでもない。女性からは、まだほとんど聞き取っていないのでわからないが、男性の中でも、40才代以上とそれ以下とでは知識に大きな開きがあるように思われる。それも特に薬用に関するものでその傾向があるように思われる（呪術への利用もあることがわかってきたが、そこでもこの傾向があるかまではつかめていない）。さらに、彼らが知識として知っているものと、実際に利用するものとの間には、かなりの開きがあるようなのである。同じ人物でも、時により言うことが異なるという現象も、このことからある程度説明できるのかもしれない。

さて、私は彼らの言葉を習得したいと思い、簡単な言い回しのアムハラ語を訳してもらおう形で、何人かに聞いてもらった。ここでも、返ってくる答えがまたしてもまちまちである。彼らによると、そのどれもまちがいではないという。いったいこれはどういうわけだと、しつこく聞いてみると、そのひとつはゴファ語だといった答えが返っ

てきたりする。ゴファ (Gofa) というのは彼らの東側に住む近隣集団のことであるが、そこには大きな町があり、商品経済はそこを通して入ってくるので、影響力は大きい。もともとゴファ語は言語系統的にもマロ語に近く、女性も含めほとんどの人が話せるようだ。もちろんその両者が違う言語であることを彼らは認識しているが、ゴファ語が彼らの日常語にもかなり浸透しているのである。そしてアムハラ語についても、似たようなことがいえるのかもしれない。つまり程度の差はあれ、彼らの多くはアムハラ語を話せるが、日常語の中に語彙のレベルで、かなりアムハラ語が入っているのである（ただしそのままではなく、彼ら流の発音に変化している）。こうなってくると、私が彼ら独自の言語マロ語を探し求めるというのは、今の日本語からやまとことばを探すことのように、あまりに彼らの実際とかけ離れていることに気づく。いったいいく通り表現を知らなければならぬのだろう。人によって言うことは著しく異なるが、今の日常語から、彼らの知るかぎりの外来語をはずした、もともとのマロ語でも、ひとつの動詞にいく通りかの活用があったりする。もちろんそれらには、今後調査を進めるうちに微妙にニュアンスの異なるものとして区別できるものも多々含まれていると思われる。

以上のことを考えているうちに、今まで自分とはとんでもない誤解を犯してきたのではないかと感じずにはいられなかった。個々の社会が、政治的経済的に完結していることはありえない話にせよ、それぞれの社会には文化的なまとまりがあり、独自の体系を保有しているという前提に、無意識的に捉われていたのではないかと。しかし、現実には、はるかに「外」の世界と連続してあることを感じさせるのである。しかもそれはさまざまな領域にわたって、いくつもの「外」の世界とつながっており、私のイメージでいえばさながらどこまでも連なる層が無数に積み重なっているかのようなのである。そしてその層はすべて平行に折り重なっているというのではなく、一部は別の層とすずきとけあってしまう、また別の層は途中からか

すんで消えてしまっていたりするといったものなのである。

もう一度先ほどの「混沌たる事態」の問題に戻りたい。同じ人でも時により違うように語ることを指摘した。私はこれを、今述べた多層的にある彼らの世界という点から理解できるのではないかといいたいのである。つまり、ある時にはひとつの「層」に準拠したものを語るが、別の時にはそれと違った「層」からのものを語っているというわけである。ここまで書いたところで、もしかしたらこれは、人類学者スベルベル (D.Sperber) の話に似たところがあるのではないかと気がついた。しかし根本的に異なるのは、いくつかある選択肢のなかから連関性によって状況に応じて使い分ける、といった発想が、彼にはないことである。そしてこのことこそ重要なのだが、彼らのなかにあるいくつかの「層」というのは、使い分け

られるべき選択肢としてあるというより (もちろんそのように意識化されているものもあるが)、もっと漠然としていて、そのいずれにもころびうるような、いわばゆらぎをふくんだ形で存在しているように思われるのである。

私はこれに思い至ったとき、これこそ彼らの社会の特質といえるのではないかとほくそえんだのだが、よく考えると私自身の社会もそうなのではないだろうか。もしかすると私は、今まで同一性や一意性といった信念を過剰に信じ込まされてきたにすぎないのではないだろうか。私のいる社会も、斉一的に語れるものとしてあるわけでは決してないのだ。もう彼らの社会を「混沌」などとよぶのはよそう。

しかし、このようにとらえていくにしても、それをいかに提示していけるのだろうか。その見通しはまったくたっていない。

(1994年4月記)
(ふじもと たけし 京都大学)

表紙写真ノート

のんびりした日、「フォト」で覗く世界

増田 研

エチオピア南部で、オモ系農耕民バンナを調査していたとき、ふと思いたって、村の東にそびえる小高い丘にのぼってみた。てっぺんに鎮座します岩の上にいると、畑だの森だの川だのと、雨季の精気を吸い取って青々と萌えたつ風景に吸い込まれそうになる。360度の空にぼっと突き出た丘を、吹きわたる風が心地よい。

双眼鏡をのぞき、スケッチブックを広げて村の様子をかきとめる仕事にもそのうち飽きてしまった。双眼鏡のことを人々は「フォト」と呼んだ。写真機のように「覗いて見る」もの、という連想だろう。疲れて横になり真っ青な空を仰いでいたら、そばにいた連中がフォトを使わせてくれという。視野の中に放牧中の自分のウシを見つけた男は、群を追っている息子にむかって丘の上からあれこれ指図しはじめた。たいした大声ではないのに丘の頂上と麓でちゃんと会話が成り立つその耳のよさに改めて敬服した。

岩の上で騒ぐ私たちは村のどこからでも丸見えだったらしく、それからしばらくの間はフォトの話題で持ちきりだった。一緒に丘に登ろうというお誘いが増え、それ以来何度かこの丘に登った。もちろん、彼らは、「ケン、ちゃんとフォトは持ってきたな」と念を押すのを忘れない。

はるかに眺めやるとその向こうにはオモ川、そしてマゴ平原が広がる。マゴは野生の宝庫だ。マゴでバッファローをしとめた者は額を赤く塗り、武勇を誇ることができる。マゴの話には男はみんな夢中になる。カンバ君はちょっと前にライオンをしとめたばかりで、彼の友情にあずかった私は幸運にもその百獣の王の毛皮一背中のあたりに穴が3つほどあいていたけれど一で昼寝をする特権を得た。ライオン肉は喰ってしまったようだ。

6月のそれほど忙しくもなく、食べ物もあり、牛の乳も豊富な一年でもっとも豊かな頃の出来事であった。

(1993年6月撮影)
(ますだ けん 東京都立大学)